

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00422

研究課題名(和文) ロバート・グリーンの改心物語とノリッジにおけるピューリタン人脈に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Robert Greene's Repentance Pamphlets

研究代表者

井出 新 (Arata, Ide)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：30193460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：グリーンは16世紀文化に浸透していた回心体験物語と決疑論を用いながら、故郷ノリッジのピューリタン共同体に属する作家として自分自身を成型することで、新しいアイデンティティを獲得し、出版戦略的に有利な立ち位置を確立しようとした。その際、彼がナラティブに積極的に取り入れたのが、ノリッジのピューリタンに広く受け入れられていた教義である。グリーンはそれを忠実になぞりつつ、同時にノリッジの聖アンドリュース教会の説教者ジョン・モアの説教による一時的な回心の逸話を絶妙な形で体験談に組み込みながら、劇的回心における聖霊の奇跡的な働きを確証として示し、読者に向けて彼の「現実」を創り出そうとしたのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究は、ノリッジ市の古文書館に所蔵されたグレート・ホスピタル慈善院関係資料に着目し、慈善院の運営委員をしていたピューリタン有力者と作家ロバート・グリーンとの関係を跡づけ、それによってグリーンが回心体験物語においてノリッジのピューリタン共同体に属する作家として自分自身を描こうとした理由を明らかにする。つまり彼はそれによって自分自身の劇的回心にリアリズムを持たせ、故郷の篤志家たちへのオマージュを示したのである。それによりグリーンの回心物語では、ピューリタン共同体の一員としての自己成型がナラティブの下部構造として機能しており、その点を明らかにしたことが本研究の成果である。

研究成果の概要(英文)：Just as, in the seventeenth century, a puritan conversion narrative became the requirement for candidates to be admitted into the Church, Robert Greene's repentance narrative was, or at least purported to be, his declaration which would have allowed him to regain, in a sense, the lowest seat available as the member of a godly congregation. To refashion himself in puritan guise and secure his position as a self-styled moral commentator, Greene established his Norwich origin, defining himself with a new narrative identity distinctive and profound enough to be recognized by his new, as well as his long-standing, readership. Greene's reference to the puritan community of Norwich provided a kind of guaranteed security for his moral stance, simultaneously offering him a clear narrative identity. In this way, whenever facing a moral crisis of his own, Greene could assume a puritan self that had been cultivated and constructed by the religious radical milieu of Norwich in the 1570s.

研究分野：英文学

キーワード：英文学 イギリス史

1. 研究開始当初の背景

ロバート・グリーンと都市ノリッジの深い関係性を最初に指摘したのはJ・チュートン・コリンズであった。*The Plays and Poems of Robert Greene* (1905)においてコリンズは、グリーンを受洗記録を発見し、ノリッジの貧しい馬具製造人の息子として生まれたと指摘した。それによりグリーンが作品をノリッジの知的・宗教的コンテクストから考える試みは若干なされたものの、新批評など文芸批評理論の影響により本格的検討は疎かにされていた。新歴史主義の台頭によって作家のパトロネッジに関する研究が再び盛り返してきてからも、依然としてグリーンの出自に関しての研究は進まなかったが、唯一ブレンダ・リチャードソンが“Robert Greene’s Yorkshire Connexions: A New Hypothesis” (1980)においてグリーンが馬具製造人の息子ではなくヨークシャー地域と繋がり深い宿屋経営者の息子だったのではないかと推測を行った。リチャードソンの論文はグリーンとヨークシャーとの関係に研究者の目を向けさせるものだったため、その後、彼女の学説が広く受け入れられるようになると、グリーンとノリッジとの関係性はさらに看過されていった。しかしながら、リチャードソンの学説は、コリンズが行ったような歴史史料の発見によるものではなく、飽くまでも仮定の上に成り立つものだった。それゆえ、コリンズの学説を支援する歴史史料が発見されれば、リチャードソンの推測は脆くも崩れ去ってしまう。実際、本研究の研究責任者が2005年に行ったノーフォーク古文書館の資料調査により、グリーンが馬具製造人の息子であったことが再確認された。その成果を纏めたものが“Robert Greene Nordovicensis, the Saddler’s Son” (2006)である。もう一度、グリーンとノリッジとの関係性を見直す必要性が生じていた。

2. 研究の目的

本研究は、十六世紀後半において絶大な人気を博した作家ロバート・グリーンを、1570年代から1590年代にかけてピューリタニズムの温床となったイングランド東部の都市ノリッジのローカルなコンテクストから捉え直そうとするものである。具体的には、グリーンと彼の生まれ故郷であるノリッジのピューリタン市議会メンバーとの人脈的繋がりを歴史史料から明らかにするとともに、グリーンを育てたノリッジの宗教的環境が『グリーン三文の知恵』(*Greene’s Groatworth of Wit*)、『ロバート・グリーンの改心』(*The Repentance of Robert Greene*)などの改心物語群の「語り」にどのように関わったのか、そしてそれがグリーン自身の作家としての自己形成にどのような役割を果たしたのかを考察する。それによって本研究は、大学才人口バート・グリーンに関する従来の作家像に修正を迫ることが研究の目的である。

3. 研究の方法

研究の方法としては、これまで行われてこなかったグリーン及びグリーンと面識があったと思われるノリッジ市議会議員や牧師に関する史料を、古文書館などに残された記録から地道に発掘していった。さらに、そうしたローカルな評伝的・歴史的知見を用いて『ロバート・グリーンの改心』をはじめとする改心物語群のナラティブの分析を行った。具体的には以下の通りである。

(1) ノリッジのノーフォーク古文書館およびケンブリッジ大学古文書館に所蔵されている史料をできる限り広く詳細に調査する。調査対象の史料は以下の通りである。

Norfolk Record Office (Norwich)

Great Hospital Account Rolls (グレート・ホスピタル慈善院会計簿)

Mayor’s Court Book (市議会議事録)

NRO Norwich City Records (ノリッジ市政に関する記録)

Cambridge University Archives (Cambridge)

Vice Chancellor’s Court Records (ケンブリッジ大学副学長裁判所記録)

Supplicats (大学卒業証明記録)

ケンブリッジ大学古文書館の記録は直接ノリッジのグリーンとは関係ないように思われるかもしれないが、グリーンは慈善院からの奨学金をもらってケンブリッジ大学へと進学したため、ノリッジからケンブリッジへの軌跡を追うためにどうしても必要となる史料である。これらの史料は分量的に極めて膨大であり、調査にかなりの時間を要するため、とりわけグリーンに直接的に関係する資料の調査から始めて、周辺の史料へと調査の対象を移していった。

(2) ノリッジのピューリタニズムに関する文献の収集と調査。特に、セント・アンドリュース教会主任牧師ジョン・モアに関する史料を渉猟することは重要な課題であり、モアが残したテクストを丹念に調査することで、改心や救済などの神学的事柄に関するモアの考え方が、グリーンが改心物語に反映されていないかどうかとも調査した。

(3) グリーンの改心物語自体のナラティブの特徴をうまく捉えるために、上記の二作品だけで

なく、さらに『グリーンの幻』(*Greene's Vision*, 1590)、『グリーンはまだ間に合う』(*Greene's Never Too Late*, 1590)、そして劇作品『ロンドンとイングランドに掲げる鏡』(*A Looking Glass for London and England*, 1590)を射程に収めて本研究を遂行した。とりわけ『ロンドンとイングランドに掲げる鏡』は、散文作品とはジャンルが違うものの、グリーンが改心ナラティヴを開始した時に制作されたばかりか、当時の反劇場主義運動に対して劇場サイドから反論を試みた劇作品でもあるため、グリーンの道徳的作家としての自己形成を追うには必要不可欠な作品である。

以上のような内容の調査・考察をおおよそ2→3→1という流れで四年間をかけて行った。

4. 研究成果

本研究では、ロバート・グリーンがノリッジ及びケンブリッジにおける活動の痕跡を探し、同時に回心体験物語『ロバート・グリーンが改心』(1592年出版)の分析を行った。それによって以下の点が明らかとなった。

(1) グリーンは16世紀文化に浸透していた回心体験物語と決疑論を用いながら、故郷ノリッジのピューリタン共同体に復位した罪人として自分自身を成型することで、新しい作家としてのアイデンティティを獲得し、出版戦略的に有利な立ち位置を確立しようとした。その際、彼がナラティヴに積極的に取り入れたのが、ノリッジのピューリタンに広く受け入れられていた教義と「神に選ばれし者」に特徴的な兆候である。グリーンはそれを忠実になぞりつつ、同時にノリッジの聖アンドリュース教会の説教者ジョン・モアの説教による一時的な回心の逸話を絶妙な形で体験談に組み込みながら、最後の劇的回心における聖霊の奇跡的な働きを確証として示し、読者に向けて彼の「現実」を創り出そうとしたのである。

(2) グリーンのジョン・モアをはじめとするピューリタンとの関係を裏付ける資料は、ノリッジ市のノーフォーク・レコード・オフィスに所蔵されたノリッジのグレート・ホスピタル慈善院関係資料の中に見出される。モアの教会に属しており、慈善院の運営委員をしていたピューリタン有力者がグリーンがケンブリッジ進学に際して奨学金を給付していたのである。これによって、彼が回心体験物語においてノリッジのピューリタン共同体に復位した罪人として自分自身を描こうとした理由が推察される。つまり、自分自身の劇的回心にリアリズムを持たせること、そして自らをケンブリッジへと送りだしてくれた故郷の篤志家たち(特にモア)に対するオマージュである。

(3) したがって、グリーンが回心物語を、作者としてのアイデンティティを形作るために用いた単なる文学的技術であり、事実無根のフィクションだったと考えるのは誤りである。自己に関する語りというものは、我々にとってもグリーンにとっても、自らが体験した「現実」を系統立てて構成するために不可欠な精神の働きである。グリーンは自分自身の回心を物語ることによって、知覚可能な知識の材源から自己を立ち上げ、自己を(再)解釈し、(再)構築し、そして(再)定義した、ということだ。その過程で、ピューリタン共同体の一員としてのアイデンティティを形作る基本的な様式が、ナラティヴのいわば下部構造として機能していたのである。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 井出 新 | 4. 巻 123-3 |
| 2. 論文標題 エリザベス朝のピューリタン回心体験ナラティブ 『ロバート・グリーン の回心』(1592) を巡って | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 藝文研究 | 6. 最初と最後の頁 31-45 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 井出 新 | 4. 巻 61 |
| 2. 論文標題 'Studie to indent new sects of singularity' 1590年前後のピューリタン構築に関する一考察 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Shakespeare Journal | 6. 最初と最後の頁 10-22 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 井出 新 | 4. 巻 119.1 |
| 2. 論文標題 海の見える窓 クリストファー・マーロウ、カンタベリー、そして新大陸 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 藝文研究 | 6. 最初と最後の頁 19-32 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 Arata Ide | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 D. S. Brewer | 5. 総ページ数 422 |
| 3. 書名 Localizing Christopher Marlowe: His Life, Plays and Mythology, 1575-1593 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|